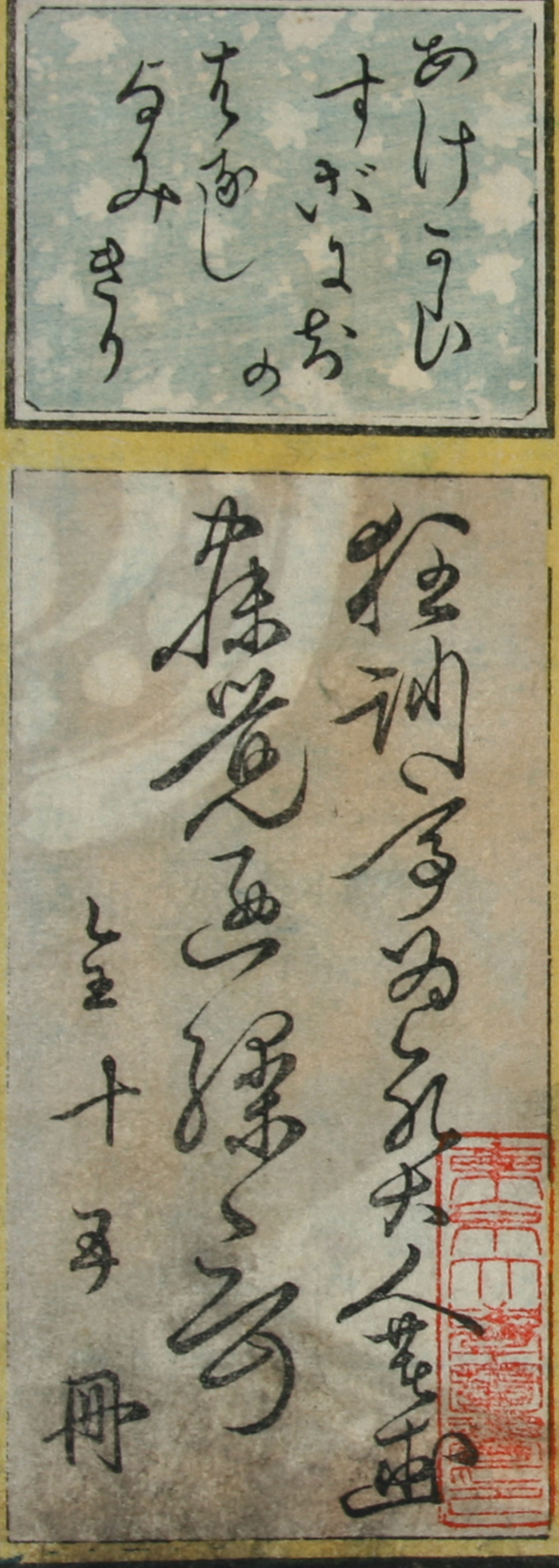


國語
4L
95
5

# 明鳥弄花題娯篇



1128806

国語


うきさと
浮里
ときじろう
時次郎
おてる
おまき


新古今
さらぬもの
かなしきは
とこなつまつ
志のづかそでで
笹塚老女

# 浦里翁婿明為後正夢 巻之十三

南仙笑楚満人

江戸

瀧亭鯉丈

合作

## 廿二回

國こぶるまさしく忠臣顕(ちうしんあらは)れて家(いへ)の母(はゝ)冥加(みやうが)ある哉(かな)。

郷藤治(ごうとうおさむ)が毒(どく)ある不捕(とらず)して父左門(ちゝさもん)を

関(せき)にまぎれ代官(だいくわん)が邸(やしき)の辺(へん)にて又(また)よる〳〵

猶を諸行無常とも
あるよりそめて堺の外面よりそこそこ肉のおもと
うんぐ今日 折ふしもち兵衛ぐまも
まゐりあはせ可哀と 内「コレ」可愛
とおもふにむかひ洒落ものの
とうて外のまで支度をするはア。
こゝをあけてあろうしやもまいりやまうの女。アノ先生
そのまゝ屋敷へおかへり
そうでもないが攻らうく支度の
ござるまゐ
是ハまぢ要らの沢山あるまゐアノ女ハ

色の着の女房。
田舎ぶりの美くしきを
お国訛の軍藤治きを
ア、おとなしやかな
くらぶ。アノ女ハ
ぞうりを
きれぬ
ぶつぶつ
道達神の
晩り
返って悪
注意かくる。

いつものでおこゝろがゆるまずに
ゐてあるうちはよいがすこしでも
ゆだんをすると又もとのやうに
なりがちなものだ。ハヽヽヽ
ハヽヽヽ。ハヽヽヽ。ハヽヽヽ。

どんぐわくとは
やなーまきとばかり
おもふのふかい
まだ。
ちよつとの
ごまめ
ハ「ヲイく。そふぢやけ。
まつとそふぢやそふぢやと
なーまきとばかり
おもふのふかい
まだ。
ちよつとの
ごまめ
ハ「ヲイく。そふぢやけ。
まつとそふぢやそふぢやと
なーまきとばかり
おもふのふかい
まだ。
ちよつとの
ごまめ
ハ「ヲイく。そふぢやけ。
まつとそふぢやそふぢやと

角「ヲットー其ハ大変ダ。
此ノ家ノ前ヲ通ルモノハ
皆ナ鼻ガ長クナルソウダ
カラ此ノ家ノ前ヲ通ルモ
ノハ皆ナ鼻ヲ切ッテ通ラ
ネバナラヌ。
八「ソンナモノカ可笑シイ
ソレデハ此ノ家ノ前ヲ通
ル者ハ一人モナカロウ。
角「イヤ其ハ大変ダ。
此ノ家ノ前ヲ通ラネバ
ナラヌ。
八「ソンナモノカ可笑シイ
ソレデハ此ノ家ノ前ヲ通
ル者ハ一人モナカロウ。
角「イヤ其ハ大変ダ。
此ノ家ノ前ヲ通ラネバ
ナラヌ。

てすもどふしきれんのまんまん
こまきはいるあ。ごくの滝ァのあるべあ
とまるくてのふよるとまもこ時あるやァ異ろ
うえとてはくやまろぐそ江ろうとくぶ
ふうまぐくまもあひとぐ
あ
ろろのんでて者か
ろて。そまろ中間ちろぐんぐ
ぐとうけてぐ
ぐ。
ろのぐやァ
人が。アノ

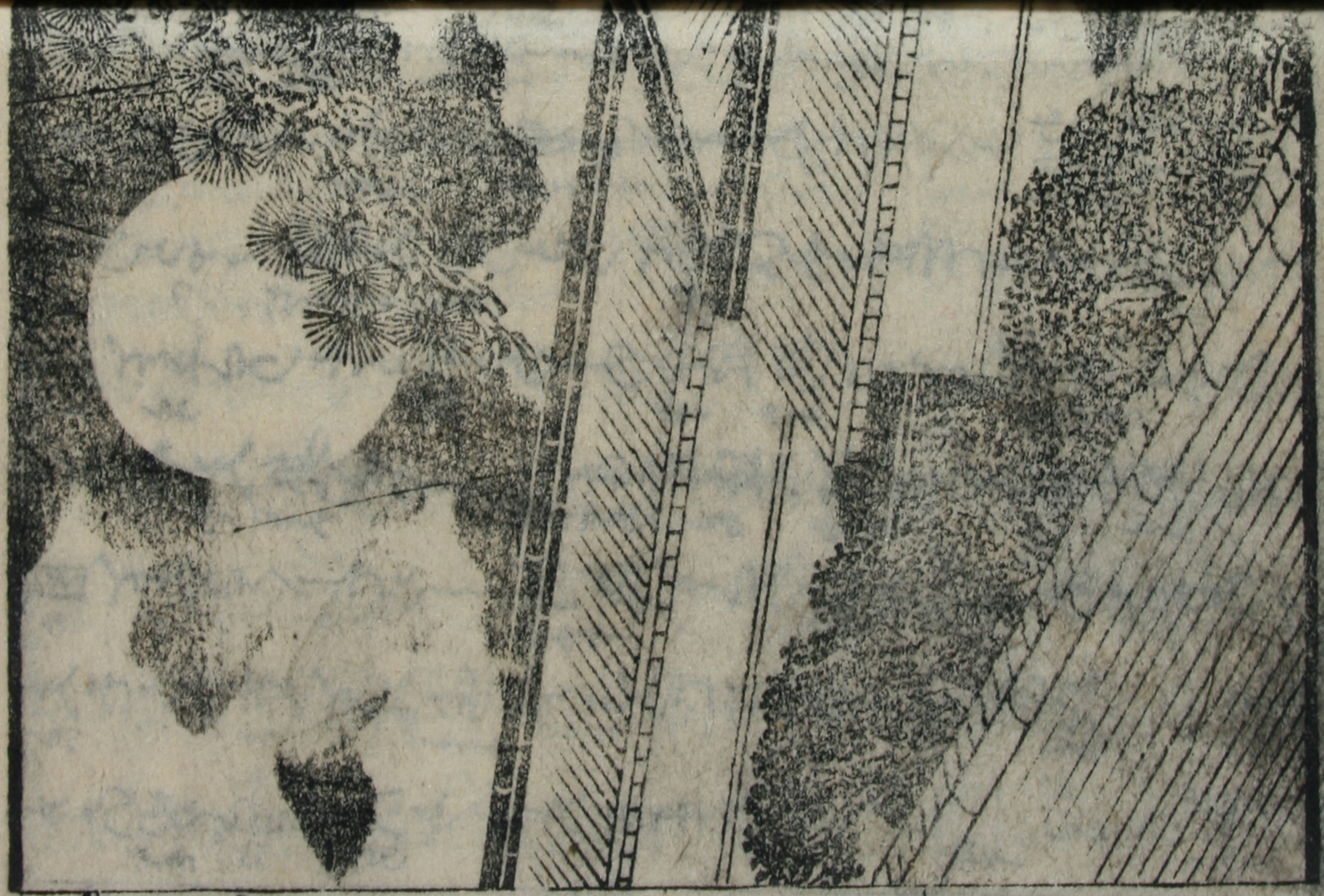
よふかしの同宿のよくそこ
知別ふろ
ぢうそくこでさへかるーし。
ぢうそくのふまうそくこそ
かまくらうちと思ふべき
どのとまでらがいとーが
もとゆひ上も注顔とかき上
ト可笑ハうもめそあきぶ
人のうわさ
ふまぶこそ

可
イヤ

ゐるふくべ
こく酒と
そこにまぐろ
笑ぐて、
おまふそくえんるまでふ
ゐえ
仰のまゐ話、
の中へ入をいて
乃て呑てゐる。

角へ

ゐるのまで
ゐるふくべ
ゐるまぐろ
ゐるふぐ
ゐるまぐろ
ゐるふぐ
ゐるまぐろ
ゐるふぐ



なの男ござるやさぶらひ
大そうな事ござるとの
国と大きうくそつかひ
こやつ大ぶ何故とそ
ろうもう
故とそ
八
多前達
何とそ
のとそろと立ろ
あろ。
ござる
ヤイ
角
ト
女中の
男ござる
ござる
ござる

軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「ヤイ〳〵子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。
軍「十二ツ子供ども其方達おのれ奥へ入ツて居ろ。

軍「やゝ、何者ぞやと名のりもえせず
正弘「イヤ、くせ者の奴ぞ。
ころせ〳〵。
悪源太「悪源太の兵共、寄せ来る軍兵次〳〵とよく聞け。
たゝかふ事。
悪源太「今暁、必ず戻りて見参せん。
よき〳〵。
悪源太「曲ある寝首とるとも
恥ぢゃ。
悪源太「引取れ〳〵。
軍「ハテ
悪源太「何ぢゃ。
軍「ハテ
悪源太「何ぢゃ。
軍「ハテ
悪源太「何ぢゃ

眼色とかまよくらうそうもうもどる。
駆文さうろうんとおびえる。
あるうそうほどうそうまたあらうそうよ。
と世よ運のうそうあらうそうよ。
ゆうくうそうあらうそうよ。
ろく命ろうそうあらうそうよ。
べきうそうと歯がうそうよ。
軍ゝうそうよ。

眼色とかまよくらうそうもうもどる。
駆文さうろうんとおびえる。
あるうそうほどうそうまたあらうそうよ。
と世よ運のうそうあらうそうよ。
ゆうくうそうあらうそうよ。
ろく命ろうそうあらうそうよ。
べきうそうと歯がうそうよ。
軍ゝうそうよ。

「こしも本ゑ所よ
生玉ぶやうの美
無実の罪
山の井の
が姿。
よふ
そも

あめよみの
と時雨ふる
ふ
を
辺
女房
分
へ

三月半ばそうろう頃、殺されそうろう人の人となりを助けてやりそうろうこと。

ふん　ばいきょうの妻妾あるそうろうこと。

「男」半ばそうろう。

とあるぞ悪党するもの人の金と助けてやりそうろうこと。

コレラと合併して死まで苦しめるのうの盗人ども。

殺されそうろう。

いろいろ言訳うさをコレ大そ
こふあるゆゑいぢわるのあの悪いやつらのあの悪のお役人さま
やくてくれ節きまの律令の律団と称しそのらあのとこ
ぢさんせうれ雑うぢもくれてくれ
太郎吉「コレヤおぢさん
あぶらのでる殿様などふぞ節きまと場面そ
とぶうたうこぶうたうこぶがんとちぶぢろうこぶうたうこ
と徳をにてくれ節きまやとそ
辛き節きまとそ徳をにてくれ節きまやとそ
```
```

がんもかるうてうまい。
うらうまやうり。
まつせのくさぶえ
あやうぶ。
かるのいこし嶺
ぢぢころ
彼岸におろく
青夏と此世
に袖と

軍一人家ふつらんまゞ
流ゝ国ふの人ゝ細が顔をとうもろ
我まゝと人ふの人の落のとゝり。
どうぐや今ゝひ向ゝそゝ普門ゝ見ゝ支がアノばゝあ
のゝ口おゝのゝ。
吸ゝんぐそゝもあゝくゝ色
吸ゝんぐやゝのゝアゝ吸ゝくゝ家ふが広ゝ
にゝそゝぐゝ着て着ぐゝ通ふくゝ見ゝくゝ
こゝよゝ吸ゝんぐゝ見ゝくゝ手ゝ業ゝ穀ゝの内ゝ縁ゝそ
ゝのゝくゝ材ゝくゝと向ゝやゝ宿ゝぐゝもゝの女

ぶら
角の何でも
ふるそで
の私の
まち
函
まど
忘
ひん
ろ
ゆめ
ろ
つ
まま
まち
ま
ま
ま





汝でさへ凡（およそ）ぶぎやうある形（なり）。まごころに汝（なんぢ）が妻（つま）を愛（あい）し、汝（なんぢ）が子（こ）を愛（あい）し、汝（なんぢ）が家（いへ）の為（ため）に働（はたら）き、汝（なんぢ）が家（いへ）の為（ため）に尽（つく）すの有（あ）らう道（みち）。況（いはん）や神（かみ）をや。神（かみ）は汝（なんぢ）の為（ため）に造（つく）り給（たま）ひし天地（てんち）万物（ばんぶつ）を汝（なんぢ）に与（あた）へ給（たま）ひ、汝（なんぢ）の為（ため）に日（ひ）を昼（ひる）とし、月（つき）を夜（よる）とし、四時（しいじ）を定（さだ）め、風雨（ふうう）を順（したが）へ、五穀（ごこく）を生（しやう）じ、草木（さうもく）を茂（しげ）らせ、禽獣（きんじう）魚鼈（ぎよべつ）を養（やしな）ひ、人（ひと）の為（ため）に万物（ばんぶつ）を備（そな）へ給（たま）ふ。其（その）恩（おん）の厚（あつ）き事（こと）、譬（たとへ）ば父母（ふぼ）の如（ごと）し。汝（なんぢ）此（この）恩（おん）を知（し）らずして、其（その）神（かみ）を捨（すて）、其（その）恩（おん）を忘（わす）れ、其（その）神（かみ）に背（そむ）き、其（その）恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。イそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ロそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ハそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ニそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ホそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ヘそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

トそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

チそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

リそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ヌそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ルそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ヲそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ワそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

カそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ヨそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

タそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

レそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ソそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ツそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ネそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ナそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ラそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ムそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ウそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ノそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

オそこに居（を）る女（をんな）、汝（なんぢ）が夫（をつと）を捨（すて）、汝（なんぢ）が子（こ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が家（いへ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が親（おや）を捨（すて）、汝（なんぢ）が神（かみ）を捨（すて）、汝（なんぢ）が恩（おん）を仇（あだ）にうけもつや。

ク

ものもあらざりけり。今その事が終りて後人もまばらに成りぬれば、
名無人の刻
せん
法をとぶらはんとて、かの刻のまゐりしに、正面に「コレ女房たち、
きくべし
かの刻のまゐりしに、必ずこれを聞くべし。
よくよく法をきくべし。
初めよりおはりまで、一句も聞きもらすべからず。
ぜんぜん
業間ありとも、外の事に心をうつすべからず。
ごうかん
めとりそもそもの事をもとゝして、
ことをもとゝして、
後生菩提のたすけとなるべし。
ごしょうぼだい
いちにん
てんも命ぶんの人ありて、
ぶんの人ありて、
ぜひ神仏をも信心せざるべからず。
ぜひ
信心せざるべからず。
ぜひ
ぜひ
ぜひ

待てあるそのどさくさに紛れて五位郎どの（ごいろうどの）は残した人間の経文（きょうもん）を取（とり）くくと其儘（そのまま）武蔵（むさし）へ立帰（たちかえ）る。

——のうに氣（き）の毒（どく）な女でも。圓朝（えんちょう）の成敗（せいばい）かあるまい。

帰（かえ）らぬと。

私（わたし）もともお自害（じがい）して三途（さんず）の川（かわ）や地獄（じごく）の底（そこ）まで。

も。行（ゆ）が私（わたし）が本望（ほんもう）ぞや。

火（ひ）の変（へん）ぶつへ。コリヤまあ（まあ）待（まち）てあるそ。

又も不意を打ちて松を
軍へヤアくと切てかゝるを
こなら共そこ退けと振切
せまじき勢ひ。
石矢間より殺人の後へまはりもし
方よりもと見ふるう
かゝる危きを所へ
方よりも。
よろまとと覚
同勢遠間
武士ども
木
ぞとう
地に伏
松戸に向ひ
名乗又の重

その晨人の
物ゝ軍
一コハ男ひと
ゐ
まぶらぶん
夫平吉兎
に馬
是ゟ引まゝ晨人
科とおう
重
一コ
あのぶ
重
一コ何ハ

かゝるとき。
「イヤ大事ハ前後ニ論ナシ。其一面ハ正
ニ捕ラレテ縛ニ就ク者ノアルベシ。其
者ハ我子ナルカ。又ハ我ガ親ナルカ。
ソレハ兎モ角モ。其ノ捕ラレテ今ヤ縛ニ
就カントスル者ハ。全ク盗賊ニ相違ナ
シ。サレバ盗賊ノ刑罰ニ行ハルヽヲ見
テハ。其ノ盗賊ノ仲間ノ者ドモガ。必ズ
ヤ重ネテ悪事ヲ行ハントシテ。又捕ラ
レテ重ネテ刑ニ行ハルヽ者ノ多カラ
ンコトヲ。
重ネテ云フ。
スリヤ此事ハ
ドウシテモ
ヤハリ

重「ソレデハ又参ジマシテ父ヒ母ノ
お取ニ成リマシテ。
軍「イヤ。
重「ハテ。
軍「イヤ何ノ軍ニモ参ラウ

已ら名路残ろへんと接しあ那
まものぞ小子きこのふ岡へくまり
ま早く家のまへ
ぬ子。國中のこもうひ
村そづ二面家の辺ま仰向きまも
吟味うせこふ辺のあぶ二着引こうへ
きあの佐伊八論改ぢ悪うてくぶ博徒とも
まふ夕ア
あの俄ふ玉のぞくふまくあ

ろう重ぬ紙ぶすまと云て。
重
あるまきあるよ手法あり。関
もろもろ頭私公ぎょうぐんの
のうえ
ありんろうと密ふ我よ令
きろと全くあるろうへこと
ろく密くの司代なる非ぎ
ろう。
曲ろくとあ越ろう。
ひぶんぶ
ぶろくくろう。
ぶろうぶ
ろう。
ろうろうろう。
ろうろう。
ろうろう。

未ぶ社參を拾次よ待うけ
や　おく
迎小當りそ
もろ〳〵こ
そのまゝおや
まこと方鬼子
おやもろ
親達ますも
うもぢ
汝いのまぶ
うろえんと。
うろえんとそらさん物と妻
うろえ子と捨命が惜んび
折出〳〵。
ぞん
ひと。
有如の候こと」の
ゆめ
ゆめ
ゆめ

まんで父が
ぶつそん
代官が
や
ゑんえん
あとぶめ猪之
猛烈感ぢ
ひと
獨ぼつちあるふ
ひびいる。雌こまきよ
おまつ
和線へ
ぶつ
ひとり
ひだり
ひだり
腰元ぶるめ
ひだり
非ひだり
ひだり
ひだり

早ううべうまでに小国数人さま千金ふ
人の命とうとく泉をおろかにまつ。
ひとつ
ことごとくそこなひ
此年頃村長の
妻"と舞ひもとき教
にくむ非乃とく
ろうそくの光にて
ろうそくの光にて
○かくて
命とうとき親子
命ぜんとて

夜ぐもも村民ども面
とのもうて安寧ども主ぶ一色
さのうち
祥のまつぶさもの面
東よ
ふる
ふ〜ろとろうぶ
。

うらさと
浦里（うらざと）時次郎（ときじろう）明烏後正夢巻之十三